

俺達とその名はサイヤ人（リメイク）

厄丸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

フリーザを倒し死んだと思われていたラカノン、自分はそのまま死んだままだと思っていたがなんと生き返ることが出来た！フリーザに復讐を果たし平和に生きれると思いきや今度はまた3年後に人造人間が来るだって？いい度胸じゃないか、片っ端からぶっ飛ばしてやる!!!

目次

復活のラカノン！新たなるドラゴンワールド！	1
1年ぶりの帰宅 チチさん怒って大激怒?!	3
圧倒的な力の差！1年間のブランクを超えろッ！	6
新たなる超サイヤ人？ラカノンの秘めたる力	11
力の副作用？暴走戦士ラカノン！	14
何故ここにいる?!惑星ベジータぶりの出会い！	17

復活のラカノン！新たなるドラゴンワールド！

ラカノン vision start

「あれ、俺は……?」

「ラカノンにいちやああああああん!!!」

「げぶはあッ!!!」

いやマジでどうしたんだ……死んだら天国に行くはずが何故か意識ない状態でずっと寝てるような状態だったし……てかマジで腹痛いー!

「ぐ、悟飯か……悟飯なのか?!」

「そうだよ！僕も生き返ったんだ!!!」

これはいい！あ、でも俺はまだ超サイヤ人になれるのだろうか？

「よおラカノン！どうやら生きけえったみてえだな！つたく、おめえはナメック星の時助けてもらったかな、今度はオラ達が助ける番だとおもってよ！」

「悟空……!」

本当に悟空はいいやつだなあ、惑星ベジータにいたときなんかこんなに優しいやついなかった気がする。

「でも本当にラカノンは不思議な奴だよな、まさか界王様でもラカノンがああ世で見つからないなんてよ」

「ああ世で見つからなかった?」

「そうみたいなんだ、界王様?にも手伝ってもらったんだけどああ世にもいなかったんだって」

へー、俺って特殊だったんだなあ↑他人事だと思いやがって

「でもその代わり占いババの婆ちゃんに連れてってもらって珍しい技を覚えたんだ!」

「珍しい技?」

「おう！瞬間移動っつうんだ!」

なんだその一瞬で地球の裏側まで行けそうな技、いや待てよ?確かそれを使える奴らがいたな、たしか……

「ヤードラット星人……?」

「あー! 確かそう言ってた気がすんぞー!」

ヤードラット星人の技つてのは気になるが……今はそれよりもだ
「俺が死んでから大体どれくらいが立った?」

「大体1年くらいかな? 確かそうだよねお父さん」

「あれ? そうだっけかあ? オラ時間とかよくわかんねえや」

こいつ後で絶対に勉強させる、せめて時間だけでも見れるようにし
なくては

「それに天津飯さんたちも生き返ってるんだよ!」

「なんだって? 地球のドラゴンボールは1年たたないと使えないじや
ないか」

「デンデのおかげで半年ぐれえだったかな? それぐらいで使えるよう
になっただい!」

マジかよ、そんなこと出来るようになってるなんてデンデ様様だ
な。

「それに兄ちゃんも生きけえってんぞー!」

「ラディッツが?! よかった、あいつも生き返っているようでちよつと
安心したよ」

「それにラディッツ叔父さん今は働いているんだよ!」

ラディッツが働いている……だと……?!

「悟飯、あとでそのお店を教えてくださいか? 後で遊びに行こう」

「うん! 行く!」

「まあまあ、でも今はやめといたほうがいんじゃないか? 兄ちゃんの
仕事の邪魔になつたらよくねえよ」

あの悟空が仕事の心配をしている!? 俺がいなかった1年半の間一
体何があつただ……

ラカノン vision fade out

1年ぶりの帰宅　チチさん怒って大激怒?!

ラカノン vision start

「俺が死んでいる1年間でそんなに変わっていたのか……」

「ああ！オラも野菜を育て始めて少しでも金を作れるように働いてんだ！」

「僕も修行をしてナメック星の時よりも強くなっただよ！」

だが本当に変わってたんだな……

ラディッツが働き始めて悟空も働いて……悟飯も知らないうちに強くなっている……

俺は死んでいるときは何故かあの世にいなかったようだし1年のことも知らない、俺の記憶だとナメック星もろともフリーザを滅ぼしたあと何も覚えていない。

「取り合えず家に帰るか！チチも家で待ってっぞ！」

「そうだよ帰ろうよ！あ、でもラカノン兄ちゃんも覚悟しておいた方がいいかも……」

「え」

サイヤ人s帰宅中

「お！帰っただな！」

「お、おう……ただいまチチさん……」

め、目が笑ってねえ……

「さて、ラカノンさ、オラの言いたいことは分かるだな？」

「は、はい……」

「なんでナメック星でたった一人で死ぬことを選んだか？悟空さか

「ら聞いたただぞ?」

「・・・」

「黙っていたら分からねえべなあ?」

「やばい……何も言い返すことが出来ない……」

「そんなにオラ達のが信用出来ないか?」

「ツ……!」

「少なくともオラ達は家族だと思って接してきただ、なのにラカノンはオラ達のことを家族だとは思っていないなかつたというんだか?」

「それは違う!」

「何が違うんだべ!聞いたただよ?フリーザとの戦いで刺し違えてでも倒すって覚悟は聞いていただ……けど、けんどよ……!」

今までチチさんはずっと後ろを向いていたがこつちを向いてその顔を見せてくる、その顔はクシヤクシヤになっていて大粒の涙を流しながら話を続けてくれる。

「そんなに復讐が大事だか?!オラ達のことを……家族や友人のことをほっぽりだしてでも!自分の命を捨ててでもやり遂げなければいけなかつたことなんだべか?!」

「それは・・・」

「悟空さだつて同じ超サイヤ人だ!ラカノンさど何が違うんだべ?同じでねえか!自分だけがフリーザが憎い?違う!ラカノンの人生をむちゃくちゃにしたフリーザはオラ達だつて憎いんだべツ!!」

「チチ……」 「お母さん……」

「オラ達だと頼りねえだか?だつたらオラ達が過ごした時間はなんだつたんだべ?全部無駄だつたんか?!」

俺のためにそこまで……

「もう自分の命を粗末に考えるのだけはやめてくれ……オラ達は心配でどうにかなつちまいそうだ……ツ!」

「……本当にすまないチチさん」

「約束してけれ、無理をするなつて言つたつて無理なのは分かつてるだ。だからこそオラ達をもつと頼つてけれ。悟空さだつて悟飯ちゃんだつて、クリリンさんや他の人達だつてきつと力になつてくれるは

ずだべー！」

俺は……俺はこんなにも仲間にも恵まれていたんだな……

フリーザはもう倒した、俺の目標は既に達成されていて正直死んだままでもいいと思っていた。けれど……

「今度は人生を楽しむために生きてみてもいいかもな……！」

「ラカノン……！」

「兄ちゃん……！」

「そうだ！その調子だからこそラカノンさだべー！」

チチさんからの説教はこれで終わった、けど俺の中でいつまでも残り続けるだろう。

何故なら俺はこんなにも仲間にも愛されているのだから……

ラカノン vision fade out

圧倒的な力の差！1年間のブランクを超えろッ！

ラカノン vision start

あの後久しぶりにパオズ山の悟空の家で寝た。ここは悟空の家でもあるが自分の家でもある、自分の家で寝るのは本当に久しぶりだ・・・

「でも俺本当に生き返ったんだな・・・」

「おーい！起きてつかラカノン！」

「お、悟空か、今行く！」

部屋を出てリビングに行けば悟飯とチチさんが一緒に勉強をしていた。

「おはようラカノンさ！」

「おはよう兄ちゃん！」

「ああ、おはよう。今はどんなところを勉強しているんだ？」

聞いても分からないところはしかねえけど・・・

「今は国語で作者の気持ちを考えろっていう問題だべ」

「うん、でもここがちよつと分からなくて・・・」

「ふむ、ちよつと見せてみ」

これは……あー、そういうことね、なるほど。いい性格してんなこの作者。

「これは（ウ）じゃないか？」

「なんでそう思うんだべ？」

「こういうのは基本どこかに作者の気持ちは書かれているんだよ、それに俺は相手の感情を読み取って戦闘を有利に進める戦い方を基本的にしているからな」

「確かにベジータさんの時は可哀そうだったなあ・・・」

そんなことを話しながら外から悟空が返ってきた、服装は動きやすい仕事服で所々泥で汚れている。

「今朝も良い野菜がいつぺえ取れたぞ！さあ！みんなで飯食おうぜ！」

「待て待て、ラディッツはまだ寝てるんじゃないか？ちよつと起こしてくるよ」

「んじゃよろしく頼むべ、オラは飯の準備をするからな！」

久々にラディッツの部屋に行く、部屋に入れば長かった髪がまとめられたラディッツが部屋着姿でいびきをかきながら寝ている。

「さて・・・オラアツ！起きろラディッツ!!」

「んおおおお!!」

布団を強引に引っぺがしてラディッツを起こす、布団に張り付いて寝ていたので引っぺがして起こしたときに床に叩きつけてしまった。正直すまん。

「いてて・・・あ、おはようございますラカノンさん」

「おう、おはよう。飯だぞラディッツ」

ラディッツは腰をさすりながらリビングに行く、俺も付いていくが冷蔵庫からお茶を取り出してからリビングに向かった。

「よし！みんな揃っただな！こうしてみんなで食うのは本当に久しぶりだべー！」

「だねー！」

「だなーさ、いただきますー！」

「いただきますー！」

「ああ・・・チチさんの飯美味すぎる・・・」

「よく味わって食ってけろ！1年ぶりのオラの飯なものな！」

こうしてみんなで飯を食いながら少しの時を過ごす、食べ終わって修行をするために外にでる。この1年で3人がどれぐらい強くなったのか見てやろうじゃねえか・・・ッ！

「よし、まずは俺からでいいよな？1年間の記憶がないとはいえ戦っていないと腕がなまりそうなんだな、俺が3人に挑む形で平気か？」

「おう！いいぜー！」

「いいよー！」

「オーケーですー！」

「じゃあまずは俺からで」

ラディッツか、1年前だとナツパとベジータに伸されていたから

な・・・

「10倍界王拳ッ！」

「あ、そういうばお前も界王拳使えていたな・・・」

「忘れんなー！」

んじや俺もやるしかねえな！

「10倍界王拳！さて、かかってこいや!!」

ラディッツが肘を突き出しながらエルボーをしてくる、それを手の平で受け止めるが続けて腹に良い一撃をくらってしまう。

「ン、グッ・・・ふう、いい一撃だなラディッツ。1年前よりずっとキレのがある」

「まだまだ余裕そうじゃないですか・・・だが俺だつて負けるつもりはない！この1年間サボっていたわけじゃないからなア!!」

一気に紅い気を開放して俺に突っ込んでくる、1年前の実力ならすぐにさばくことが出来たが今はそんなことはない。1年でだいぶ3人は成長しているようだな。

「ふんッ！」

「なにい?!」

ラディッツの腕にチョップを入れて地面に落とす、そのすきに俺もやられたことをやり返す為腹に2発ほど拳と蹴りを叩き込んで一気に殴り飛ばして距離をとる。

「やられたことはやり返さないと、なあラディッツ!!」

取った距離を一気に詰めて今度は俺から攻撃を仕掛ける、ここはやはり俺の戦闘の十八番を使うしかないな。楽に勝てるような相手ではない。

「」「多重残像拳！」「」

「やっぱり使ってきましたか、残像拳！」

「1こちらとら1年以上修行をしていないんでな、小細工でも使わないと今は勝てないさ」

残像の俺がそうしゃべる、だがこれは事実だからしょうがないことなんだ。

だからこそ俺は負けねえ・・・！

「よそ見をしていていいのか？」

「と言って俺達はラディッツに突撃をかましていく、前までのラディッツならこれはさばき切れていないだろうが今のやつは華麗に一体一体さばいていく。」

「これぐらいなら俺でも対処できます、それともこんなもんですか？」
「そう思っているのがお前の敗因だ」

「こいつも馬鹿な奴だ、自分が勝っていると言っていると調子に乗る癖は1年前と変わっていない。」

「確信は持てなかったが予想は大当たりだ。」

「いてて……」

「お前は油断する癖がなければ普通に強いのに……本当に勿体なくて損な性格してるぜ」

「と言ってラディッツとの腕試しはここで終わる、次は……」

「次は僕の番だね！」

「おう、兄ちゃんはまだまだ体が訛ったままだからな。実践が一番体が慣れる最高の手段だ」

「だがラディッツのはたまたま隙が1年前から変わってなかっただけで悟空が悟飯にそれを教えていないわけがないからな、下手したら悟飯が超サイヤ人になってもおかしくはない……」

「はああああああああ!!!!」

「すげえだろラカノン！悟飯はおめえの代わりになるんだってナメツク星から帰ってきてから半年で超サイヤ人になったんだ！」

「はあ?!」

「おいおい……いくらなんでも鍛えすぎじゃないか?!これはさすがに俺でも……」

「あれ、ラカノン兄ちゃん本気ださくないの？」（純粹無垢）

「勝てねえ……ッ！」

「あ、そうだ。ラカノン！ベジータも超サイヤ人になれるようになってんぞ！」

「嘘だろ……?いや待て、よく考えれば悟飯もベジータもフリーザの時に一緒に生き延びたサイヤ人じゃないか。これは本当にうかうか」

してられないな……

「悟空！悪いんだけどちよつと出かけないといけなところが出来たわ！」

「えー?!まだオラと戦ってねえじゃねえか！」

「大丈夫だ！数日間家を空ける予定だから少し待っていてくれ！」

悟空は不満そうな顔をしているが渋々了承してくれた。悟飯には泣きつかれたがラディッツが取り繕ってくれたのでそれは感謝しよう、後でなんか送ってやるか……

「取り合えず俺が目指さないといけない場所は西の都のカプセルコーポレーションだ！」

そう言っつて俺は急ぎたい為に超サイヤ人になって飛んでいく、1年間は仕方がないとはいえ重力室があれば俺は悟空たちにすぐに追いつけるはずだ!!!

ラカノン vision fade-out

新たなる超サイヤ人？ラカノンの秘めたる力

ラカノン vision start

「どうしたラカノン！ナメック星での貴様の力はそんなものじゃなかったはずだ！」

「うるせえー！てめえは帰ってから重力室で修行していただろうが！一緒にすんじゃねえ！」

くっそ……マジで当たらねえ!!!

一年間でここまで実力の差がつくものなのか?!同じ超サイヤ人なのに技のキレもパンチの鋭さもナメック星の比じゃねえ！

「地球に来た時の恨みだ！顔面に喰らいやがれえ!!!」

「ふざけんな！そんなのでめえの逆恨みじゃねえか！」

やべえ……当たる！

ラカノン vision fade-out

ベジータ vision start

「は……？」

「え、なんで俺避けれたの？」

どういうことだ……俺は確かに奴の顔面目掛けて殴ったはず。

なのに奴は何故俺の後ろにいる？いや、これは……

「おいラカノン、その技はヤードラット星人のものだな？貴様一体どこで覚えやがった」

「いや……俺もなんで出来たのか分かっていないんだ。だけど何故か使えるっていう確信はある……もしかして俺の記憶のない1年間で覚えた技なのか？」

なに？まさかこいつ1年間の記憶がないというのか？

「まあ貴様が一年間どこで何をしていたのかは興味はない、今の貴様がこれ以上ないほど俺様の特訓相手にもってこいということが分か

るのだからなあ・・・！」

「こいつやべえな」

「安心しろ、もし死にかけてもあの女が作った高性能メデイカルマシンにぶち込んでやる。だから安心して死にかけろ!!!」

ベジータ vision fade-out

〜三日後〜

ラカノン vision start

(あの野郎……いくらメデイカルマシンがあるからとはいえやりすぎだろ……ッ！)

マジで1年間でこの差はやばい……だがこれで3回目の死にかけパワーアップだ、これで何とか食らいついていけるぐらいになれるといいが……

「早くしやがれラカノン！」

「うるせえ！あぁいいだろう！なら力を見せてやるよ！」

「だったら見せてみる、だがこの超エリート超サイヤ人であるベジータ様に勝てるとは到底思えんがな」

メデイカルマシンの回復で考えた俺の新しい超サイヤ人を見せてやる……！

ラカノン vision fade-out

ベジータ vision start

「な、なんだその力は……！」

なんなんだこのパワーは……！見た目は超サイヤ人だが雰囲気が違う！

「ふーッ！ふーッ！やるぞ……ベジータアアアアアアアア!!!」

ラカノンが突撃してくる、通常ならば反応できる速度だがいつもの

速度ではない!!!

「マアダメアダメアアアアアアア!!!」

「ぐっ落ち着きやがれええ!」

直線的になったところを手刀で意識を刈り取る、こうでもしなければ俺様がやられていた・・・

「一体全体この力はなんなんだ?見た限りかなりのパワーを感じたが俺様の力には及ばなかったな」

しかし本当に危なかったな・・・メデイカルマシンに突っ込んでおくか。

ベジータ vision fade out

力の副作用？暴走戦士ラカノン！

ラカノン vision fade-out

「あれ、ここは・・・」

「お！やつと起きたんだなラカノン！」

悟空がこつちに近寄ってくる、俺はいつの間にか寝ていたようだが一体どうやってパオズ山に？

「なんかベジータが運んできたぞ、それとあの技は使わない方がいいとも言ってたな。一体どんな技を使ったんだ？」

「あー・・・メデイカルマシンの突っ込まれている間って考える時間があるだろ？その時に考えていたんだよ、気を頭に送ったらどうなるんだらうって」

その話をしたら悟空は顔をしかめてこつちを見てくる。

「ラカノン……たしかにそれは使わない方がいい」

「だよなあ、記憶は覚えているしどれぐらいの力かもある程度は把握はできたが多分本気で使うと俺がぶっ壊れちゃうな」

そう言うのと更に悟空は顔をしかめる、ナメツク星の件もあるし本当に使うかどうか怪しんでいるな。

「ちよつと外に出てみてくれラカノン、オラにその新しい超サイヤ人を見せてほしいんだ」

「え？いいけど・・・」

俺たちは外に出て戦闘着に着替える、お互いに超サイヤ人になつて気を高めあう。

「悟空、俺が暴走したら殺してでも止めてくれよ？」

「縁起でもねえこと言うなラカノン……たとえもし暴走したとしても俺が殺さずに止めてみせる」

そんな会話をしながら頭に気をゆっくり送り始める、理屈は界王拳と一緒に少しづつ蛇口を緩めていく感じに……

「ハア・・・！ハア・・・！悪いな悟空、ここが限界だ……いくぜ？」

「ああ、こい！ラカノン!!!」

俺は一気に距離を詰めて悟空に接近する、軽くストレートを打つが簡単にいなされてしまいカウンターをくらいそうになる。

「おっと、カウンターは予測できてたさ」

カウンターの拳を喰らうがその勢いを殺さずに回転して後ろ回し蹴りを喰らわせてやる。多少だが俺も強くなっているみたいだな、悟空の動きがいつもよりも早く視認できる。

「今までそんな動きをしなかったなラカノン、腕をあげたな？」

「もちろん、いつまでもベジータのサンドバッグになっていたわけじゃないさ」

軽い会話を交わしながら更に戦闘は激しく閃光をはじけさせていく。

「ああ・・・楽しいなあ悟空！」

「そうだ・・・それでこそだラカノンツ!!」

ラカノン vision fade-out

悟飯 vision start

朝から大きな音が僕たちの家で鳴り響く、その音で僕は思わず外を見た。

「わあく・・・!!ラカノン兄ちゃん凄いや!もうお父さんに喰らいついてる!」

1週間前とは全然違う!でも1年間の差をどうやって1週間で・・・?

そう思いながらお父さん達の戦いを見ているとラカノン兄ちゃんの動きが更に早くなった、もしかしてラカノン兄ちゃんは戦いの中でどんどん進化している・・・?!

「いくぜ悟空ツ!スパニツシューー」

スパニツシューバスターじゃない!片手じゃなくて両手で出そうとしている?!

悟飯 vision fade | out

悟空 vision start

「ブラストオオオオオオオオツ!!!」

「いいぜ・・・いいぞラカノンッ!!!」

俺はかめはめ波を構えてそのまま撃つ、本当になんて奴だ!この1年間で俺達も強くなっているはずだ!!なのにラカノンは1週間でここまで強くなつてきやがった!!!

お前は・・・本当にお前つてやつは・・・!!!

「最高だラカノン!お前はここまで強くなつてきやがった・・・俺はこの瞬間が待ち遠しかったッ!!!」

「俺もだ!地球に帰ってきてきて力の差を感じて無理してでも潜在能力を開放したかいがあつたぜ!!!」

バチバチと火花が散りながらお互いの気功波がぶつかりあう、超サイヤ人になったせいはいつまでもこうして戦っていたと思えてしまう。しかしラカノンを見ると次第に苦しそうに頭を抱えているのを視界に入れてしまった。

「ラカノン?!おい!大丈夫か?」

「不味い・・・ッ!ハア・・・ハア・・・!」

「なんだ?!一体どうしたんだ?!」

ラカノンの気が更に膨れ上がつてついには俺の気を超えてしまった。

「ガルルルッ・・・!」

「ラカノン・・・?」

目の前にいる友達のサイヤ人は極大な気と一緒に白目をむいて俺に襲いかかってきた。

悟空 vision fade | out

何故ここにいる?! 惑星ベジータぶりの出会い!

悟空 vision start

「おい! ラカノン! 目を覚ますんだラカノン!!!」

「グルルラアアアアアアアアアツ!!!」

なんだこのパワーは?! これもまさか強制的に潜在能力を開放した結果だというのか?! だとしたら一体どうやって・・・

「どうした孫! なぜラカノンの気がここまでいるんだ?!」

「ピッコロ! なぜおまえがここに?!」

「そんなことはどうでもいい! 今はラカノンを止める方が先だ!」

ピッコロが来てくれたが長くはもたないだろう、だがどうして大猿のような状態に・・・?

『頭に気を流したらどうなるんだろう』

あの時か!

「ピッコロ! ラカノンを何とか気絶させてくれ! 俺がラカノンを抑える、その間になんとかするんだ!」

ピッコロが待てというがこの状態のラカノンを放っておく方が危険だ! 気が少しずつ落ちてきている・・・このままではラカノンが本当に死んでしまう!

「お父さん! 僕も手伝う! ハアアアアアアアア!!!」

「いぞ悟飯! このまま3人でラカノンを止めるんだ!」

「任せておけ、何とかラカノンを止めてやろう!」

待っているラカノン、お前を殺させるなんてことは俺たちが絶対にしてやるものか!

悟空 vision fade-out

ラカノン? vision start

「頭いてえ……なんだよこれ」

頭の痛さで俺は目を覚ます、周りを見れば真っ暗で5Mも先が見えない程暗い。

「ここはてめえの精神の中だクソガキ」

「え?!ちよ、バーダック?!」

なんでバーダックがいるんだ? バーダックはもうずっと前に死んでいるはず……

「てめえが腑抜けたことになっているから喝を入れに来てやったんだよ。なんなんだあのさまは」

「あれは……ちよっと新しい力を試してみたくてツいた?!」

バーダックからげんこつが飛んでくる、いやマジで痛てえんだけど……

「それでもサイヤ人か? 本当に世話の焼けるガキだったく……」

「んぐ……それはすまない……」

バーダックはため息をつきながら手をかざしてエネルギー波に似た光線を俺に浴びせてくる。自分の背中の下あたりに違和感を感じる……まさか!

「お前の暴走は強制的にサイヤ人としての本能を引き出したからこそ起こった状態だ、なら尻尾があればある程度は制御できるだろう」

「え、バーダックいつの間になんかことが出来るようになったんだ?」

「感謝するなら俺じゃなくて時の界王神にいえ、俺はあいつに言われてやっただけだからな」

気が付くとあの懐かしい感覚がよみがえってくる、俺は本当に尻尾が生えたんだな。

「それでもだバーダック、本当にありがとう」

「けっ礼なら奴に言えつての……がんばれよ、ラカノン」

バーダックが後ろを向きながら俺を認めてくれる、俺はそれだけでどこか認められるような気がして恥ずかしそうに頬をかいてしまう。

「じゃあな、バーダック……さて!こんなところでいつまでもウジウジしてられないな!ハアアアアアアアッ!!」

俺は一気に気を開放してこの空間をぶち壊そうと超サイヤ人にな

る。

「俺は誇り高き戦闘民族サイヤ人のラカノンだ！自分の理性ごときに負けてたまるかあああああ!!！」

脳に気を流して潜在能力を開放する、1回目2回目と加減をミスつたがもう失敗はしない！

「こんな暗闇が俺の中の精神世界だと？笑わせやがって！」

俺の中がこんな暗闇であってたまるか！精神世界なら併用して使っても壊れはしねえだろ！

「さっさとこんな世界から俺を出しやがれ！はあああああああああああ!!！」

『強制潜在能力解放』、それに超サイヤ人を併用して変身すると世界にひびが入り始める、意識が薄れていく中目の前にいくつかのシルエツトが浮かび上がる。

1人目は超サイヤ人だがどこか落ち着いていて今の自分よりもずっと次元が高い姿、他の姿も今の自分とは比べ物にならないぐらいの次元に至っているのは目に見えて分かることだった。

(稲妻を纏っている形態に髪の毛の長い形態までありやがる……紅い髪の毛で更に青いのもいて大猿のような奴もいる……これが超サイヤ人の更に先なら俺が至ってやる……絶対にこの形態をモノにして超え続けてやるツ!!！)

俺の意識はそこでスツと消えていった。

ラカノン vision fade-out